

2023年12月11日（日）「神のかたち」

ハイデルベルク信仰問答より

問6 神は、そのように、人間を悪い、よこしまな者にお造りになったのですか。

答え いいえ、違います。それどころか、神は人間を善い者として、ご自分の像かたちに似せてお造りになりました。すなわち、真に、正しい、聖なる者にお造りになりました。それは、人間が造り主なる神を正しく知り、神を心から愛し、神と共に永遠の祝福の中に生き、神を讃美し、神の栄光をたたえるためであります。

儒教で「性善説」「性悪説」という言葉があるのをご存知でしょう。私がこれらの言葉を初めて聞いたのは高校の倫理の授業の中だったと記憶していますが、当時も教会で聖書のメッセージを聞いていた私は、それとの関連性を考えさせられたものです。聖書の人間観とはどっちに当てはまるのだろうか。国語辞典による説明を引用してみましよう。

「(性善説とは) 人間は善を行うべき道徳的本性を先天的に具有しており、悪の行為はその本性を汚損・隠蔽することから起こるとする説。」

「(性悪説とは) 人間の本性を利己的欲望とみて、善の行為は後天的習得によってのみ可能とする説。」

人間論を学ぶことは、自分とは何者であるかを認識することであり、人類史で起きてきた出来事の根本を探ることであります。聖書的人間観には、性善説と性悪説の両方が含まれていると私は理解しています。どちらか片方だけでは説明がつかず、「人は何のために救われるのか」という問いへの答えが損なわれるかもしれません。

問6がどういう文脈で出てきたかを確認しておきましょう。前回は、問4と問5をまとめて扱いました。概してこんな内容だったのを思い出していただければと思います。

問4：主イエスが二つに集約された「神と人を愛すること」こそが律法の中心である

問5：人はその律法を完全に守れないどころか、生まれつき神と人を憎む傾向がある

これは言わば希望と絶望の入り混じった人間観と言えます。人は何が善であるか律法を通して知ることができるにも拘らず、生まれてくる段階で善に逆らう性質を持ってしまっているというのです。悪いことをしようと決意するわけでもなく、知らないうちに神と人を憎んでしまう。そんなことはしていないという反論を他所に、現にそうしているではないかという現実が突きつけられる。律法はそのような現状を明らかにしているというのです。

そこで新たな問いが生じてきます。「神は、そのように、人間を悪い、よこしまな者にお造りになったのですか」と。人間がそんなに悪い存在なのであれば、人間を造った神の側に不手際があったのではないか。失敗作だったか、あるいは意図的に人間を悪く造られたのか。もし神が人間を良く造っておられたら、神と人を憎むような罪を犯すことはなかったのではないか。

問6の中で「よこしまな者」と訳されているところがありますが、別の翻訳では「さかさまなもの」となっているものもあります。それについて、このような説明も加えられています。「さかさま」とは、「あべこべであること」「上下ひっくり返ってしまっていること」「左右違ってしまっていること」など。つまり、神と人とを愛すべきものとして造られた人間が、それと真逆のことをやっけてしまっているというのです。憎むとは愛することの反対である。

しかし、そうは言ってみましても「神を憎む」という事柄はいまいちピンとこないかもしれません。自分が神を憎んでいるなどということは考えてもみない人がほとんどでしょう。これは聖書による啓示を通してでない、理解できないことなのです。私の友人の中で、私には想像もつかないほど過酷な環境で生まれてきた人がいます。寝ても覚めても暴力と背中合わせであった。彼が「僕は神を呪ったことがある」と言っていたのを覚えています。これが誰にでも当てはまるわけではないでしょう。しかし、実は本質的に神を憎む行動を取っているということはあるかもしれない。一つ説明がつくかなと思うこととしては、神がお造りになったものを憎むというケースが考えられる。それは隣人であり、自分自身であり、被造世界全体です。隣人を憎むとき、実は人は神を憎んでいるのかもしれない。他人はもちろん、家族に対してさえ憎しみを抱くのが人間というものではないか。自分自身を受け入れられないとき、「どうしてこのような存在に造ったのだ」という潜在的な憎しみがあるのかもしれない。自分の容姿や性格で気に入らないところは誰でもあるのではないのでしょうか。自然界に存在する生物を憎んだり虐げたりするところにも、やはり「神のもの」を傷つける心が働いていると言えないだろうか。人間が自分たちにとっての便利さを追求するあまり、その結果被造物が呻き苦しんでいるとしたら。

例は尽きませんが、もし生きとし生けるもののすべてが神によって造られたとするなら、人間は少なくとも間接的に神を憎むということをしていると思われまふ。どうしてそのようなってしまったのか。見えるものに対しても、見えないものに対しても、無条件に心からの愛を注ぐことができたなら、すべての人間がそうであつたら、世界に混乱はなかつたことでしょう。自己中心というものが存在せず、すべてが他者への思いやりと配慮によって成り立っていたとするならば、憎しみなどというものは入り込む余地もなかつたはず。人の内に潜む「憎しみ」、それは創造者である神がもたらしたものなのだろうか。

いいえ、違います。それどころか、神は人間を善い者として、ご自分の像に似せてお造りになりました。すなわち、真に、正しい、聖なる者にお造りになりました。それは、人間が造り主なる神を正しく知り、神を心から愛し、神と共に永遠の祝福の中に生き、神を讃美し、神の栄光をたたえるためであります。

問6の質問の方に紙面を割いてしまいましたが、より重要なのはこの回答です。ここでは、「神は人間を善い者として、ご自分の像に似せてお造りになりました」と言われています。ここに「神のかたち」という創世1:26の表現が登場します。

**神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」**

「神のかたち」が何を意味するのかについて、伝統的には三つの代表的な見解があります。

- ① 関係的 (relational) …すべての被造物の中で人間だけが神を知り、意識的に神との関係をもつように造られた。
- ② 機能的 (functional) …神は人間に被造世界を統治支配する権威をお与えになった。
- ③ 実体的 (substantive) …人間には神と共通する特徴または資質が与えられている (精神と身体の統一性、倫理道徳性、理性と意志など)。

どれが優先的であるかという問題がありますが、いずれの要素も「神のかたち」という言葉には含まれていると思われます。人間は神との関係の中で生きるべき存在であり、地を管理する責任が与えられており、神と同じ性質を有している。すべての被造物の中で特別な寵愛を受けて造られた存在である、それが聖書の人間観です。「**真に、正しい、聖なる者**」とあるように、本来「神の愛」を現すことのできるものとして人間は造られていた。罪や穢れとは無縁の存在として造られ、関係性においても、統治においても、一切のことを誤りなく行なうことができた。

**神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。(創世1:31)**

では、なぜ人は悪くなってしまったか。心に憎しみを抱き、偽りを語り、曲がった生き方をするようになってしまったか。聖書は、人が神から離れたその時からすべてが壊れたのだと説明しています。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。(ローマ5:12-14)

造られた当初の人間は神の栄光を身に纏っていた。しかし、それは墮落のときに損なわれた。考えること、行なうことに、絶えず不純な動機が入り込んでしまう。少しずつ道が歪んでいる。

そのような人間が形成する世界が悲惨な状態になっていくのは当然であります。現在の世界は著しい二極化が進んでいることをどれだけの人が認識しているのでしょうか。世界中の富が一極集中的に数パーセントの人に握られ、庶民は彼らの奴隷のように制限された資産の中で生きる共産主義的な社会が形成されようとしています。これほどの不平等を生み出す思想は、人間の罪と欲望から出てきていると言わざるをえないでしょう。

では、人は救われることによって何を取り戻していくのか。回答の後半では、人間が造られた目的が明らかにされています。

**それは、人間が造り主なる神を正しく知り、神を心から愛し、神と共に永遠の祝福の中に生き、神を讃美し、神の栄光をたたえるためであります。**

この内容を見ると、先の三つの「神のかたち」の要素が浮かび上がってくる。まず神との関係が元通りにされ、人間は自分の造り主を正しく知ることができるようになる。その神を心から愛するようになる。神を愛するようになると、隣人、自分自身、被造物をも愛する道を模索し始める。それができるように聖霊が助けてくださる。この新しい生き方が地上で実現し始め、それは永遠の世界へと続いていくものとなる。神を賛美し栄光を讃えるとは、私たちのすべての生活が礼拝と結びつくことを意味するのです。

私たちは何のために救われたか。問6はそのことを示してくれました。愛する者となる。この短い結論にすべてが集約されています。「神のかたち」を取り戻すことは、私たちの救い主イエス・キリストの恵みによって実現するのです。

### 【祈り】

私たちを、被造物すべてを愛するようにお造りくださった、天の父なる神様。愛することが正しい生き方であると知りながら、それができないジレンマの中を歩んでいました。主イエスの贖いは、愛せない泥沼から私たちを救い出してくれたのです。神、隣人、自分自身、被造世界のすべてを愛する者とならせてください。私たちの心に愛の炎を燃え立たせてください。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
人の心に聖なる律法を書き記し、そこに正しい道を見出させ給う、父なる神の愛、  
愛することに苦悩するすべての者に、神の愛をもたらし給うた、主イエス・キリストの恵み、  
救いにより、神、隣人、自分自身、被造世界を愛する者となし給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。